

地質学雑誌 第111巻 第1号 54-55 ページ, 2005年1月
Jour. Geol. Soc. Japan, Vol. 111, No. 1, p. 54-55, January 2005

ノート

飛驒外縁帯の英語表記について

On the English expression of the Hida Gaïen belt

小嶋 智* 竹内 誠** 東田和弘***

Satoru Kojima, Makoto Takeuchi**
 and Kazuhiro Tsukada****

2004年10月1日受付. 2004年11月26日受理.

* 岐阜大学工学部社会基盤工学科
 Department of Civil Engineering, Gifu University, Gifu 501-1193, Japan

** 名古屋大学大学院環境学研究科
 Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Nagoya 464-8602, Japan

*** 名古屋大学博物館
 The Nagoya University Museum, Nagoya 464-8601, Japan

Abstract: The Hida Gaïen belt, one of the Paleozoic-Mesozoic geologic units in central Japan, has been expressed in various ways in English, such as Hida “Gaïen” belt, Hida marginal belt, Circum-Hida terrane, Circum-Hida tectonic zone, etc. When the special issue of this journal entitled “Recent progress and future perspective of research on the Hida Gaïen belt” was edited for publication, as invited editors we recommended the authors to use the expression of Hida Gaïen belt in order to avoid misunderstanding of the geologic characteristics of this belt by foreign researchers. This note summarizes the discussion between the authors during the process of deciding which is the best expression.

Key words: Hida Gaïen belt, Hida marginal belt, Circum-Hida tectonic zone, geologic unit, English translation

2004年10月号の地質学雑誌は、地質学会中部支部が2003年に行った飛驒外縁帯に関するシンポジウムの結果をとりまとめた特集号（以下特集号と略す）となった。我々はその世話人として、執筆者各位にシンポジウムの折だけでなく、その後も電子メールを使って様々な話題について議論して頂いた。その中で、飛驒外縁帯の英語表記を統一するか否かが話題となった。飛驒外縁帯の英語表記として、これまで Hida marginal belt, Circum-Hida belt, Hida “Gaïen” belt などが用いられてきた。また、belt の代わりに structural belt, tectonic zone, terrane などが用いられることもあり、さらに、それらを大文字で始めるか小文字で始めるかということも考えると、何十通りもの表記法が併存することになる。議論の結果、特集号で完全に統一することは難しいが、Hida Gaïen belt を使うことを推奨しようということになった。このノートは、その議論の結果に我々の私見を加えてまとめたもので

ある。

飛驒外縁帯を初めて提唱したのは亀井（1955）および亀井・猪郷（1957）であるが、そこには英語表記はない（ちなみに、亀井は飛驒外縁帯ではなく、ひだ外縁構造帯と呼んでいる）。その後、亀井（1962）は英文要旨の中で Circum Hida tectonic zone と表記している。野沢・儀見（1956）は飛驒帯南縁部を含めた部分をひだ構造帯と呼び、英語では Hida tectonic zone と表記している。Minato et al. (1965) は Hida marginal structural belt と表記している。Saito (1985) は Hida marginal と表記している。Ichikawa (1990) は先白亜紀地帯のまとめを行い、その中で飛驒外縁帯を Hida “Gaïen” belt あるいは Hida-Gaïen belt と表記することを提案している。Kimura et al. (1991) は、飛驒外縁帯にあたる部分を Hida marginal area としている。1992年に京都で開催された第29回万国地質学会に先だって出版された、IUGS (International Union of Geological Sciences) の機関誌 Episodes の1991年9月号は日本の地質の特集号となっている。この中で、Banno and Nakajima (1991) は飛驒外縁帯を Hida marginal belt と表記している。一方、産業技術総合研究所地質調査総合センターは地質調査所の時代から今日まで、ほぼ一貫して Hida Marginal Belt (あるいは Hida marginal belt) を用いてきた（例えば、Yoshida, 1975; Tanaka and Nozawa, 1977; 広川ほか, 1978; 地質調査所, 1982）。このようにしてみると、飛驒外縁帯は様々な英文表記法で海外に紹介されてきたことがわかる。このことは日本の地質を勉強しようとする外国人に多かれ少なかれ混乱を与えていることであろう。

まず、日本語・英語の区別なく、飛驒外縁帯をただ単に飛驒外縁帯と呼ぶか飛驒外縁構造帯と呼ぶかという問題がある。特集号では、田沢（2004）は飛驒外縁帯について「構造線（帯）であるという見解が重視され（中略）飛驒外縁帯そのものの形成について考察することが手薄になったきらいがある」と述べている。また、東田ほか（2004）でもふれたように、我々は飛驒外縁帯をその地質構造の特徴のみにもとづいて定義することは、現時点では難しいと考えている。以上のような理由から、特集号では、構造帯（英語では tectonic belt, structural belt など）の語は用いず、単に帯 (belt) と表記することを推奨した。また、terrane はその定義に、一つのテレーンは共通した地史をもつという概念を含んでいる（たとえば Jones et al., 1983）ので、飛驒外縁帯のような複合地質体を一括して表す場合には不向きであろう。

問題が英語表記に関することである以上、外国人にとってどの表現が最も的確に日本語の概念を表し、誤解を生じるおそれが少ないかが重要である。外国人が日本の地質のことを

知ろうとして手に取る書物は様々あろうが、産業技術総合研究所地質調査総合センターの出版物や地質図である場合も多いであろう。地質調査総合センターは Hida Marginal Belt に表記を統一しているので、それに従うのも一つの方法である。特集号の執筆者で、Hida marginal belt と表記されている方々の多くも、特にこの表記にこだわるつもりはないが、最も一般的に使われている表記法だからという理由で使用しているとのことであった。しかし Ichikawa (1990) はあえて Hida "Gaien" belt を使っている。その理由として、飛驒外縁帯は飛驒帯の縁辺相でもなければ飛驒帯を完全にとりまいていないわけでもない、Hida marginal belt や circum-Hida belt などの語は適当ではないことをあげている。特集号の執筆者で、Hida Gaien belt を使っている方々も同様な理由からであった。我々は、飛驒外縁帯構成岩類が飛驒帯の縁辺相であるか否かは、現時点では決められないと考えている。また、飛驒外縁帯構成岩類が様々な起源の岩石から構成されている可能性も高い。以上のような状況の中で、両者の根拠を比較すれば、Hida Gaien belt を使う方が好ましいのではないかというのが、この表記法を推奨した理由である。もちろん、「外縁」を「Gaien」とローマ字表記しても、飛驒帯の東～南側に狭長な地帯として分布するという日本語の意味を伝えることはできない。しかし、無理に英語に訳して誤解を与えるよりは、「外縁」を固有名詞とみなしてローマ字表記の方が無難であろう。さらに、上記のような分布形態は飛驒外縁帯を扱った論文では図示されることがほとんどであるし、そうでなくても文章で説明すれば事足りるのである。なお、Ichikawa (1990) は Gaien を引用符でかこって使用したが、固有名詞と同じように大文字で始めることにより、引用符は不用であろうと考えた。

正式に定義された層序単位 (Formation, Group など) は大文字で始めることが国際ルールとして定められている (Salvador, 1994)。しかし、構造単位については国際的な取り決めがないのが現状である。この件に関して、アメリカ地質学会誌 (Bulletin) にコメントが書かれている (Thomas and Hatcher, 1988; 当時の学会誌の編集委員長)。その中で彼らは Pine Mountain belt, Cordilleran orogen など为例に挙げ、構造単位は小文字で始めるのがよいのではないかとコメントしている。特に、basin のように地形と地質の両方の分野で使われる語については、地形を指す場合は大文字で始めることが慣習となっているので、小文字で始めるのが混乱を避ける意味でも良いとしている。この例からもわかるように、構造単位を大文字で始めるか小文字で始めるかは欧米人の間でも統一されていないようである。どちらでなければならないということはないが、地質学の英語の問題なのでアメリカ

の地質学会誌の編集者の意見に従うのが良いのではないかと考え、特集号では Hida Gaien belt を推奨した。

謝 辞 特集号執筆者および編集担当の方々には、飛驒外縁帯の英語表記に関して様々なご意見を頂いた。狩野謙一地質学雑誌編集委員長にはこのノートを投稿するよう勧めて頂いた。水谷伸治郎名古屋大学名誉教授には構造単位の英語表記に関する文献を教えて頂いた。査読者の大阪市立大学八尾昭教授には有益なご意見を頂いた。以上の方々に記して感謝する。

引用文献

- Banno, S. and Nakajima, T., 1991, Metamorphic belts of Japan. *Episodes*, **14**, 280-285.
- 地質調査所, 1982, 日本地質アトラス. 国土地図, 東京, 119p.
- 広川 治・吉田 尚・今井 功・山田直利・秦 光男・猪木幸男・石田正夫・磯見 博・野沢 保・小野晃司・大沢 穠・坂本亨・田中啓策・寺岡易司・対馬坤六・山口昇一・小野千恵子・遠田朝子, 1978, 日本地質図, 1: 1,000,000 (第2版), 地質調査所.
- Ichikawa, K., 1990, Pre-Cretaceous terranes of Japan. In Ichikawa, K., Mizutani, S., Hara, I., Hada, S. and Yao, A., eds., *Pre-Cretaceous terranes of Japan*, Publ. IGCP Project no. 224, Nippon Insatsu Shuppan, Osaka, 1-12.
- Jones, D.L., Howell, D.G., Coney, P.J. and Monger, J.W.H., 1983, Recognition, character, and analysis of tectonostratigraphic terranes in western North America. In Hashimoto, M. and Uyeda, S., eds., *Accretion tectonics in the circum-Pacific regions*, Terra Sci. Publ. Co., Tokyo, 21-35.
- 亀井節夫, 1955, "ひだ外縁構造帯" について. 飛驒山地の地質研究連絡紙, no.7, 10-12.
- 亀井節夫, 1962, 飛驒山地のデヴォン系について. 飛驒山地の地質研究, 33-43.
- 亀井節夫・猪郷久義, 1957, ひだ外縁構造帯の地質. 地質雑, **63**, 413.
- Kimura, T., Hayami, I. and Yoshida, S., 1991, *Geology of Japan*. Univ. Tokyo Press, Tokyo, 287p.
- Minato, M., Gorai, M. and Hunahashi, M., 1965 eds., *The geologic developments of the Japanese Islands*. Tsukiji Shokan, Tokyo, 442p.
- 野沢 保・磯見 博, 1956, 船津付近で見られるひだ変成岩と、船津花崗閃緑岩と、古生層との関係 (ひだ構造帯の覚え書). 地質雑, **62**, 104-113.
- Saito, Y., 1985, Jurassic geologic framework in the Japanese Islands. In Howell, D. G., ed., *Tectonostratigraphic terranes of the circum-Pacific region*, Circum-Pacific Council for Energy and Mineral Resources, Earth Sci. Ser., Vol. 1, Houston, 401-407.
- Salvador, A., 1994 ed., *International stratigraphic guide*. 2nd ed., Intern. Union Geol. Sci., Trondheim, and Geol. Soc. Amer., Boulder, 214p.
- Tanaka, K. and Nozawa, T., 1977 eds., *Geology and mineral resources of Japan*. 3rd ed., Geol. Surv. Japan, Kawasaki, 430p.
- 田沢純一, 2004, 飛驒外縁帯の古生代～中生代テクトニクスに関する従来の研究と今後の課題. 地質雑, **110**, 567-579.
- Thomas, B. and Hatcher, B., 1988, Comments. *Bull. Geol. Soc. Amer.*, **100**, 998.
- 東田和弘・竹内 誠・小嶋 智, 2004, 飛驒外縁帯の再定義. 地質雑, **110**, 640-658.
- Yoshida, T., 1975 ed., *An outline of the geology of Japan*. 3rd. ed., Geol. Surv. Japan, Kawasaki, 61p.